

第12編 泥藍大島紬用淡藍色の染色法

泥藍大島紬は、柄模様になる藍色を植物藍で染色し、地色はシャリンバイ染色で黒く染色したのが、泥藍大島紬である。

この加工法は、前記によって発酵建てした藍液で、淡藍色に染色した糸を整経、糊張り、締め加工した緋ムシロを泥染して、地色を黒色に染色すると、緋の色は緋締めで防染されているので、先染した藍色が、柄模様となって紬に表われる。

これが、泥藍大島紬である。

第1章 緋用淡藍色の染色

合成染料の藍色はX%で浸染すると、目的の濃度及び色目、そうしてムラなく染色されるが、この藍色は植物藍の発酵藍で、淡藍色に染色しなければならないので、藍の発酵状態や、インジゴピュアーの含有量によって染着が異なるので、濃くなるとか、ムラ染になり易いので、この染色は、藍の発酵状態を勘案して染色しなければならない。技術が必要である。即ち、この淡藍色を濃く染色すると、色がくすんだ柄になるほか、緋がこまかいため、製織における緋調整が困難になるので、この藍色は、良好な色目や織易さを考慮した濃度（参考までに、シリヤスファストブルー3GL, 1.2～1.3%）程度、さらにはムラなく染色することが条件であり、この染色の如何によって、泥藍紬の良否を大きく左右する大事な染色である。

1. この淡藍色をムラなく染色する方法

- ア 染色の糸は、60℃以上の温水、または水に1・2時間浸漬した後、水洗い、脱水し、水気があるうちに染色すること。
- イ 染色は、ムラ染を防止するため、最初は使い古した藍か、藍分の少ない藍液で染色し、糸を藍液になじませて、ムラにならないよう下地をつけるようにし、2回目の染色に移る。
- ウ 2回目の染色は、1回目よりやや発酵の良い藍で染色し、少しずつ濃度を上げていくようにし、3回目の染色に移る。
- エ 3回目の染色は、緋用の淡藍色の濃度と、きれいな藍色に染色することが大切であるから、発酵の良い藍で染色する。この場合、藍の発酵状態や染着度を勘案し、緋に適する濃度、さらにはきれいな藍色、そしてムラのない藍色になるよう染色すること。
- オ ムラ染にならないようにするため、上記のように、淡い藍液から良い藍液へ

と、3回を要して染色することも重要であるが、このほか、染色糸の絞り法である。藍液に浸けた糸は、4・5回絞ること。又強く絞り、糸に藍液がムラに付着しないよう、平均に絞り、又直ちに糸をたたいて、空気酸化させる等、これもムラ染防止の重要な作業である。

カ 上記のように、ムラ染防止に重視するのは、このムラ染によって、不合格になり、又販路や価格、さらには工場経営を大きく左右するほか、この色ムラの補正は、不可能であるからである。

2. 良好な緋用淡藍色

前に説明したように、この染色は藍の発酵状態によって色目やムラ染、さらには堅牢度も左右されるので、次のように染色されるのが、良い淡藍染である。

ア 淡藍染した糸を、2・3回水洗いしても、特に色落ちしないとか、糊付けでも特に色落ちしない藍色は、大体堅牢な淡藍染である。

イ その藍色が化学染料ではないかと思われる位に、きれいな藍色に染色されていること。

ウ 色ムラがなく、特に総糸のくくり目の付近もムラなく染色されていること。

3. 淡藍染がムラになる原因

ア 良質な糸でなかった場合

生糸の質が悪いとか、撚ムラ、精練ムラ、さらには精練後の水洗い不足により、絹糸に石鹼分等が残っていた場合、又は絹糸の太さが異なること等により色ムラが発生する。

イ 染色前の糸を十分、水で浸めしてない場合

絹糸に、水洗い不足や薬品処理によって、水が滲まない糸がある。このような糸は、藍染でムラになり易い。

ウ 染竹に糸を多く掛げるとか、重ねて染色した場合

染竹に糸を多く掛げるとか、重ねて染色すると、染色中糸が広がらないとか、糸が重なるので、ムラ染になり易く、又、ムラ絞りになり易いこと。

エ 染色においてムラ絞りした場合

この染色は藍液に浸し、絞って染色するのであるが、これをムラ絞りした場合は、藍の染液が少ない部分と、多く含んだ部分とができ、これが色ムラとなる。したがって、藍染後の糸絞りを4・5回おこなうのは、このムラ絞りがないようにするためである。

オ 空気酸化を不平均にした場合

この藍染は、発酵（還元）した液で染色するので、染色中は緑色であるが、糸を絞って空気にさらすと、酸化されて青色となる。これが発酵藍の染色及び発色の仕方である。したがって、ムラ絞りや染色後、酸化発色させないまま糸を積み重ねておくと、色ムラになり易い。

カ 良く発酵した藍に最初で染色した場合

このような藍は、染着が早いので、ムラになり易く、又、目的の色より濃く染色されるだけで、ムラは直らない。このように、濃くなった藍色を直すため、脱色すると、色は直らず、糸は毛羽が発生し、加工不能になること。

キ 1・2回の藍液で目的の濃度に染色した場合

緋用淡藍色の濃度は限度がある。ところがこの濃度を、1・2回の工程で目的の濃度に染色することは、ムラ染になり易いので、使い古しの藍液で染色する等は、ムラ染を防止するためである。

4. 製品に色ムラが発生する原因

泥藍紬に色ムラが発生するのは、上記(3)の染色によって発生する場合があるが、染色後の締加工や仕上げ加工による場合も、色ムラが発生することがある。その原因は、次の場合に発生する。

ア 淡藍染した糸を竿に掛けて、ムラ染がないかを点検しなかった場合

淡藍染は、これまで説明したように、染色によってムラが発生することがあるので、淡糊付け前、又は整経前にムラがないかを1玉、1玉点検し、この時点で色ムラを防止すること。

イ 緋締め用の粘度が淡い場合

緋締め用の糊付けは、防染のためにおこなうのであるから、この糊の粘度が淡いと、水を含んだ時、フスの膨張が悪くなるので、染色によって締めて防染した部分に、染料が浸透汚染し、これが雲のような色ムラとなって紬に表われるので、紬加工における緋締め用の糊粘度は、製品の良否を大きく左右する重要な作業である。

ウ 緋締めが特にやわらかい場合

大島紬の緋は、綿糸で締めて防染して緋を造るのであるが、この綿糸での締めが弱ければ、締めた中に染料が浸透することになる。その証拠に、村山大島は原料糸を板に巻き、これを数十枚重ね、金具でボート締めした状態で、染料を注いで染色するので、村山大島紬の緋は、真白く染色されるのである。この

ように、緋ヒビの良否は、この緋締めの強弱に大きく左右されることがわかる。

大島紬は、絹糸を16本とか、24本引揃えて緋締めしているのので、その16本の表面にある糸は、上記によって汚染され、中心にあった糸は、汚染されないことになるので、1本の糸でも白味と黒味の部分とが、表われる。このような糸を織ると、雲のような色ムラとなって、紬に表われる。

エ 鉄分の多い泥田で染色した場合

シャリンバイ液で緋を染色すると、締めて防染した部分にも、少なからずシャリンバイ液が滲んでいる訳で、そこに濃い鉄分が滲むと、黒味に汚染することになる。これがひどいものは、黒ヒビや、フスの表面の糸が汚染すると、これが紬に、雲のような色ムラとなって表われる。

オ 発酵の悪い藍で染色した場合

発酵の悪い藍で染色した糸は、加工における水洗いや、糊付けで、藍色が落ちて色が悪くなるほか、蒸熱処理で変色や色ムラとなること。

カ 淡藍染した糸を長い時間、直射日光に照らした場合

淡藍染した糸を、長時間直射日光に照らすと、藍色が退色し、色ムラとなるので、染糸は陰干しすること。

キ 緋締め用粘度や、緋締めがやわらかかったことにより、泥藍抜染によって締めた中の藍色まで脱色され、色が悪くなるほか、色ムラにもなること。

ク 合成染料の摺込染が多い場合

数色の摺込染や、部分的に多く摺込んだ緋は、総解きして水洗いする際、この摺込染が藍色を汚染し、藍色を悪くするほか、色ムラになる場合もある。

ケ 種油やオリーブ油で亜美処理（油ユジヤ）した場合

植物藍の淡色は、種油やオリーブ油で処理すると、くすんだ色になるほか、ムラに処理され易く、これが色ムラとなり、又多く使用すると、種油を着けたような紬となること。

備考

泥藍紬の色ムラには、大きく分けて2種類ある。その1つは、紬に雲のような色ムラと、階段のように、ある巾だけきちっと色が異なる場合とがある。

前者の雲のような色ムラは、これまで説明した原因によるが、後者の色段ムラは、糸1玉だけ色が異なっていた場合と、ヨコの場合は、1仕切だけ異なった加工による場合等があるので、緋用の淡藍色を1玉、1玉点検すること。同じ糸、同じ加工

第4章 植物藍の淡藍色の堅牢度

ア 日光に対する変退色

淡藍染の糸は、日光に対して変退色するので、加工中長時間、直射日光に当たらないよう乾燥すること。

イ 蒸熱処理による変退色

淡藍染は、蒸熱処理によって変退色することがある。これは、発酵の良い藍で染色した糸や、緋ムシロのままで1時間程度蒸すのは、変退色はしないが、発酵の悪い藍や緋を総解き、水洗いした緋糸を長時間、又は2回蒸すと、藍色が変退色することがある。但し、良好に発酵している藍での染色や、直射日光での乾燥及び、蒸し処理に注意すれば、特に不良紬とはならない。

ウ 水洗いや糊付けによる色落ち

この藍染は染色直後は、水洗いや摩擦にやや弱い点があるが、染色後、月日が経つと堅牢度は、やや良くなる。但し、緋締め用糊付けや、糊張りの時、藍色が異状に落ち糊や手が藍色に汚染するのは、不良藍染である。このような藍染は、泥染や仕上げ加工でも色落ちして、ねずみ色の泥藍紬となる恐れがある。

備考

この泥藍紬の項で、淡藍染に重点して説明したが、泥染については、前記第10編、第8章の緋の染色工程で染色し、さらに泥藍抜染に堪える泥染法等についても、泥染の項で述べてあるので、ここでは省略する。

但し、泥藍緋は泥藍抜染に堪える堅牢な染色の必要から、シャリンバイの液染を10回程度と、泥田での染色を1回程度余分に染色することが、おこなわれている。